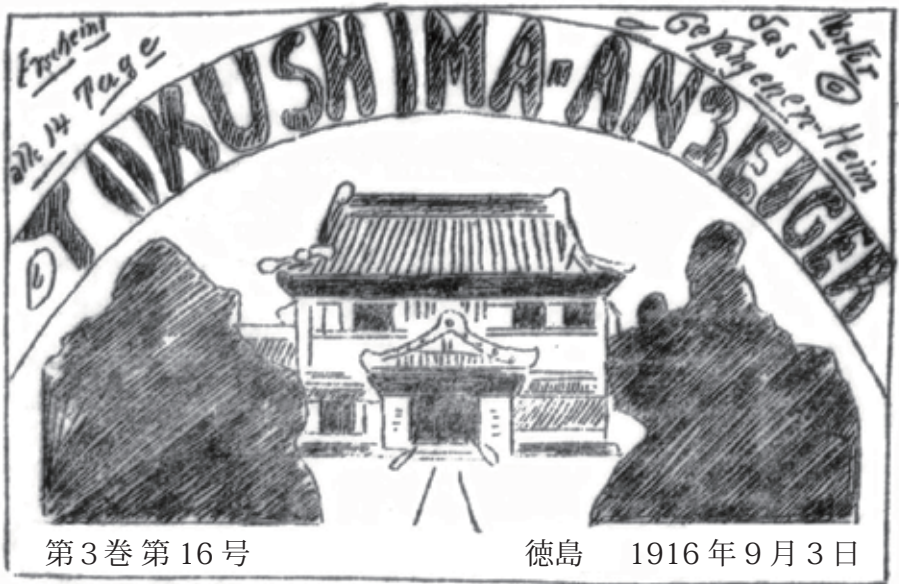




イタリアとルーマニアの参戦

イタリアはこれまでずっとその同盟国から、ドイツに宣戦布告するように責め立てられていた。ほんとうにイタリア政府内にひとかけらでも礼儀への気遣いというものがあって、それが裏切りに走ることに妨げになっていたのだろうか。実際、首相が交代すると、この礼儀の最後のかけらも消え去ってしまった。8月26日、イタリアはドイツに対し宣戦布告した。ただ、それ以前とくにドイツとの商取引は禁止されていたのだったが。

イタリアの統一が今日あるのは1866年と1870/71年のプロイセンならびにドイツの勝利によるところ大であるし、イタリアの工業と商業が盛んとなったのも大部分ドイツからの資金によるのに、理由もなしにドイツに宣戦布告するとは、まったく運命の皮肉としか言いようがない。イタリアほど民族が道徳的に墮落したところがあったらうか。そのオーストリア

への宣戦布告以来、われわれの敬意の点で落ち込んできているとすれば、疑いもなく今は最低のところにある。

軍事的には、イタリアの参戦はおそらくドイツにとって大した意味はない。しかし経済的な観点からはそうは行かない。イタリアの銀行と工業にはかなりの額にのぼるドイツの金がつぎ込まれていて、それをイギリスが今回の戦争で導入した強奪システムによって差し押さえられてしまうかもしれないのである。

ルーマニアの参戦は、はるかに不愉快なニュースであった。8月27日、ルーマニア王国はオーストリア・ハンガリーに宣戦布告を行った。これに応じてわれわれ側からもルーマニアへの宣戦布告が行われた。ブルガリアとトルコがわが国と歩調を合わせたかどうか、その知らせはまだ届いていないが、ここに届いたニュースでは両国の外交代表部はブカレストを退去したそうである。

1年前に、ルーマニアがわが方に敵対するよう、敵が働きかけをしていることを指摘したことがある。戦争が始まってこのかた、ブカレストでは大規模な陰謀工作が繰り広げられていたのだろう。

戦争勃発前、ルーマニアは一般に三国同盟側であると見なされていた。1914年8月に薨去したカロル王は紛れもなく真の親ドイツ派であり、死ぬまでルーマニア軍をドイツ軍と協力し合って戦わせるべく努力していた。当然ながら、ロシアがルーマニアの最大の敵であると考えていたからである。しかし戦争が始まってすぐに、敵がずっと以前からブカレストでも事前工作を行っていたことを認めずにはいられなかった。おそらくループルとポンドがばらまかれていたのだろう。カロル王の死と共に三国同盟はルーマニアでの最強の支えを失った。たしかに最後まで、古くからの親独派の何人かは賞賛すべき勇気でドイツ側につくよう主張してくれたけれど。ブコヴィナでのロシア軍の勝利が、ルーマニア国内でロシア側が有利となる決定要因となったと考えて、おそらく間違いあるまい。

ルーマニアが敵方につくことになって、少なくとも75万人の軍勢が新

たにそちらに加わることになる。少なからぬ東部戦線の延伸がなされることは目に見えている。ドイツと同盟国にとって、この打撃が予想されたものであるのは確かである。少し前からルーマニア国境に部隊が集結していると言われていて、宣戦布告のニュースと同時に早くもハンガリー・ルーマニア国境での戦闘とわが方の勝利が伝わっているからである。この新しい敵との最初の会戦が勝利に終わったことが、わが方にとって良い兆候となって欲しいものである。

収容所展望

ふさが込むというのは、私の趣味ではないが、この数週間のさまざまな不愉快なことを思い出すと、自分の楽天主義を思い切り発揮しないと気分が落ち込みそうになる。

この前の視察によって日本の陸軍省は、ここの空間的な状況の狭さを考えると、暑い時期には人々に戸外での水浴という形である程度涼ませる必要があることを納得した。そこで再び、水泳パンツが配布され、昇り降りのはしごが取り付けられ、収容所から富田川の下流、約 500m に水浴場を示す赤い旗をつけた竹竿が立てられた。その後、実際に一度泳ぎに出かけたものの、翌日にはコレラの危険があるために早くも禁止されてしまった。最初のうち、市内には罹患例が発見されていなかっただけに、これは慎重すぎるのではないかと思われた。しかし日曜日以降、市内にも患者が現れ、その数は日ごとに増えている。このために、外出がすべて禁止され、差し当たり収容所から全く出られなくなってしまった。配達されるものは、すべて事務棟の方で受け取っているので、病気が伝染する危険はかなり少なくなっている。

調理長は先月の初めから、腕前の確かなフンビヒー等兵曹から克蘭ツ兵曹に変わった。食事にあてられる金額が、先月の中頃より減額されてい

る。従ってクランツ兵曹は、どうやっても前任者の料理を越えることはできないだろう。それどころか、それ自体少ない食事がさらに少なくなるだろう。

楽団は、非常に大規模で、立派な演奏であった記念コンサートが終わった後、数週間の休暇に入った。これまでの功績を讃えてその日の午後、小さなパーティが催された。もちろん休暇の間も、楽団員それぞれは上を目指してさらに練習を続けるであろう。

喜ばしいことに、再び故郷からの郵便が相当数届いてきた。一部日付が3月初旬のものがあるものの、十分に早くやって来た。ルーマニアがオーストリアに対し宣戦布告したので、ここにはもっと居ることになるのを覚悟しなければならない。とはいえ、ルーマニアは早いうちに宣戦布告したものの、戦争が終わる頃に戦闘に加わるつもりでももちろんあったから、戦争は終わりに近づいているという見解を取ることも可能だ。無論そう思うには、ちょっぴり楽天的でなければならないが。

潜水艦「ドイチュラント」号についてのスペインの評価

読者のひとりが、スペインの新聞『リベルタス』の「ドイチュラント」号について記事の翻訳を届けてくれた。そこには、ドイツ人の最新の仕事ぶりを非常に感激した様子で伝えている。

潜水艦が敵の艦船をものともせず、無傷で長旅を果たしたことを描き、その後こう続ける。

全世界は、この潜水艦の航海がドイツにとって大きな勝利であり、今回の戦争での最大のできごとのひとつに数えられることを真面目に、そして敬意をもって認めねばならない。

ドイツ科学にとってなんとすばらしい勝利であろうか。協商国のひとつでもその潜水艦がこのような業績をあげたことがあっただろうか。イギリ

スの潜水艦はドイツとくらべてどれほどのものだろう。科学よ。ドイツ精神よ。汝らに心の底から挨拶を送る。

この航海について冗談が飛び交っていた。私の立場からすると、この旅行はドイツが今回の戦争で成し遂げた中で最も優れた業績である。繰り返すが、これはドイツの科学とドイツの精神の勝利なのである。イギリス人とは、神の怒りにふれる大罪のあとで人間が考えうる最悪の存在である。そういう彼らが、ドイツ人の偉大な行為、かくも比類なき業績のニュースが飛び込んできたときに、さぞかし鳥肌を立てたにちがいない。それは、ヘラクレスの冒険の日々のよく知られたいくつかの行為と並び称されるほどのものである。

もし、ドイツ人がこの武器をやみくもに使うことになると、ひどいことになる。哀れなイギリス商船。哀れなイギリス貿易。

このような業績を前にして、イギリス人たちがスペインで探り、鼻をくんくんと嗅ぎ回っていることは何とつまらぬことであろうか。この御仁らの頭から抜けない考え、ドイツの潜水艦がスペインに停泊地を持ち、補給を受けているなどと考えるのもそうだ。4,000 マイルも走れる船が、世界のどこかに隠れたり、食糧補給を受ける必要があるとでもいうのか。

この潜水艦は、スペインのカルタヘナにやってきて、薬とアルフォンス王への書簡を運んでくる（それも大量に）という英雄行為を繰り返した。ドイツは世界に向かってその完全無欠さ、科学におけるその進歩ぶりを教えようとしているように見える。連合国側が薬の消費と販売を制限しているのに対し、ドイツはイギリスの海上封鎖、フランスの陰謀、ロシアのコサック兵をものともせず世界のあらゆる場所に薬品を送っている。

ドイツの野蛮さを喧伝する輩は、ドイツの薬が世界のあらゆる場所に広まっているというこの事実を知らねばならないし、優勢な「英国艦隊」は「ドイチュラント」号のすばらしい行為への賛美を聞かねばならない。

完璧を期すため、1916年8月20日の第50回コンサートの曲目を以下にあげる。

第1部

1. 序曲「静かな海と楽しい航海」 F. メンデルスゾーン
2. 「歓喜に寄す」、第9交響曲ニ短調より L. van ベートーヴェン
3. ヴァイオリンとオーケストラ伴奏のためのロマンス J. S. スヴェンセン

独奏 ハンゼン上等軍楽兵曹

4. 「ヴォータンの別離と火の魔法」、『ワルキューレ』より
リヒャルト・ワーグナー

第2部

軍隊行進曲、音による大きな軍隊の絵画 L. ロット

第3部

1. たいまつ舞曲第1番ロ長調 マイヤベアー
2. ワルツ「南国のバラ」 J. シュトラウス
3. 現代オペレッタ巡回 L. ウルバハ
4. 祝典序曲 カール＝マリア v. ウェーバー

青島戦（4）

教育はドイツの訓練規定に厳格にしたが行われ、イギリス人大佐と香港から来るイギリス人将官による通常の視察のほかに、最近では年に一度青島から来るドイツ人少佐による実見も行われていた。東アジア巡洋艦隊の将校および兵員と一緒に戦地勤務演習でもって総合教練は完結するのだった。ドイツ人中隊はつねに、どのような場合にも極めて広範囲にわ

たる要求に応えることを義務とし、暴動が起きたときはいつでも出動できることを折々に示していた。

このドイツ人義勇兵中隊からは大尉を始めとして、ほとんど全員青島に姿を見せていた。人々が十分に役に立つことが早々と分かったため、兵役についていなかった者もすぐに前線に送られた。北京のドイツ公使館はどのような防護であれ、何も無しにはできなかったのも、ごく少人数がこの首都に残された。青島の中隊の定員を満たすため、後備兵中隊（第三海兵大隊第7中隊）から39名が海軍東アジア分遣隊第3中隊に振り向けられた。後に最初のうち北京に居残っていた兵士も、そこへ義勇兵の補充ができたので青島に移ってきた。

制服貸与と武装

8月18日の朝は私に制服貸与があった。すべてを身につけるまでかなり時間がかかった。何よりもサイズの大きい靴が十分な数量なかったのである。午後は各人200発の弾薬を受け取った。それは一部弾薬盒、一部食料袋に入れて持ち運ぶようになっていた。

ビスマルク兵營の大きな演習場は、建物が四角く周囲を取り囲んでおり、見ていて興味をそそられるものであった。ここでは早朝から兵士の訓練が行われた。その中に、ほんの少し前に上海で会ったり、東部の別の場所で知り合いになった友人の姿も何人か見かけた。彼等の務めはつらいものであった。早朝3時半に起こされ、部屋を掃除し、コーヒーを取りに行く。その後教練と射撃の授業がある。外へ長時間の行軍に出かけることもあった。こんなことに東アジアで安穏な暮らしに慣れた者は、つらく感じる人もいた。どんどん細くなっていく体型がそれを雄弁に語っていて、「おい、ずいぶん変わったな」などという言葉が何度となく聞かれたものである。

新兵宣誓

ちょうどこの時期に、新しく到着した新兵の宣誓式が行われていた。「私

は、わが愛する祖国ドイツに命を捧げます。死ぬまで忠実に。ひとりはいみんなのために、みんなはひとりのために」

これは、危険が差し迫ったときにドイツ人の心に湧き起こって駆け抜け、厳かな兵士の宣誓において外に表わし出された力強い感情である。

私は非常に感動して、この厳粛な行為をながめていた。どうして私にも宣誓しろと言わなかったのだろうか。私のことを忘れていたのか。このことを上官に伝えた方がいいのではないかと考えた。しかし私たちはみんな何のために戦うのか分かっていたので、誓いは私の胸の中に封印したのであった。こういうわけで、私は宣誓することなく戦場に出て行ったのである。

海軍東アジア分遣隊第3中隊

わが中隊に関して言えば、この日は概してかなり静かなものであった。点呼に出るのは2回だけですんだ。いくつかの変更が後からなされた。最初の大混乱のなかで、配属はかならずしも目的にそった形に行えなかったのである。

非常に暑かった。部屋はぜんぶ超満員であった。やっとこさ香港からの予備役たちがいる下士官の部屋、すでに8名が入っていたが、そこに場所を見つけた。夜になっても涼しくはならず、とても眠るどころではなかった。たくさんの蚊が私たちを責め立て、あけすけな口汚い言葉がときどき聞こえて、誰も期待の安らぎを得られないことを示していた。

行軍へ

8月19日正午ごろ、各人行軍への準備をするようにと伝達を受けた。大きな荷物は置いておき、必要な日用品だけを持参するようにとのことであった。午後3時45分、行軍に備えてコート、テント布、飯盒、水筒、食料袋と200発の弾薬を携え、中隊は兵営の前に集合した。現役兵はさらに背囊を持っていたが、それは予備役の装備にはないものであった。4時

きっかりに大尉が姿を見せた。彼は背が高く太り気味の将校で、顔は日に焼け鋭い気品のある顔貌をしていた。彼はがっしりとした、黄色みがあった中国の小型馬に乗っていた。

「気をつけ！かしら右！」と号令が響き、大尉の挨拶がすむと、(トル?) 次の号令がかかった。「直れ！になえ銃！右向け右！歩調を取らず前へ進め！」、こうしてモルトケ兵舎、モルトケ兵営、ゲルマニア醸造所を通り過ぎ、青島から 16 キロ離れた李村への行進が始まった。

見知らぬ地での戦闘

昼の時間はかなり過ぎていたのに、相変わらずほんとうに暑い天気だった。その天気の蒸し暑さとうとうしさは、初めのうち行進の雰囲気の中にもあった。それは人々の様子から見て取れ、その顔には不安の様子が浮かんでいた。人々は一步一步、もの思いに耽りながら進んでいった。故郷のようすはどうなのだろうか。両親は、私がここにいることを知っているのだろうか。妻や子供達は元気だろうか。戦争はいつまで続いて、ここではどんなことが起きるのだろうか。そのような考えが、おそらくこの瞬間、全員の心に浮かんでいたのだろう。それでも全員にはきっぱりとした心持ちも現れていた。誰もが、祖国のためならば自分の全てを投げ出す用意があったのである。愛しい人に別れを告げることなく、歌も軍楽隊の響きもなく見知らぬ地での戦闘へと進んでいった。

李村への到着

行程のほぼ半ば、とある十字路で休憩を取った。ここで人々、特に予備役の人は互いに少しばかり知り合う機会を得た。ふたたび出発したときには、雰囲気は目に見えて活発となった。それからかなり経ってから、人気の軍歌「おおドイツよ、栄誉あれ」が響いてきた。午後8時ごろ、かなり暗くなったところに李村に到着した。中隊の半数は、以前農事試験場の付属舎であった納屋のようなところに宿営し、残りの半数は川の対岸の、本来

の李村の集落のなかにある古い中国人学校に宿泊場所を取った。到着すると、まず夕食のソーセージ、パン、コーヒーを受け取った。その後すぐに、自分のベッドを整えにかかった。

つづく



シュピーゲル（鏡）

『トクシマ・アンツアイ
ガー』第3巻第16号
（1916年9月3日）
ユーモア付録



帰 郷

「すごい」汽船がエルベ川河口に向かっている。強い西風が2本の巨大な煙突から出てくる煙の重い黒雲を吹き流し、船の進行方向へたなびかせている。風はとてつもなく2つの長い故郷の三角旗をあおって、その端がはげしく波を叩いている。それはまるで、鈍重な巨人に向かっていらいと「もっと早く、早く」と叫びかけているかのようなのである。しかし船はその落ち着きをくずすことはない。ゆったりと変わらぬ歩みで船は航路を進む。船はゆっくり、いかめしく右、左とその船体を傾かせる。

どこまでも広がる空では風が白雲の塊を吹き流している。雲が太陽を隠すと、海は鈍い暗緑色となり、そこに汚いねずみ色の泡がしみのように広がる。またしばしば雲が太陽を遮らなくなる。そうすると遠くから陽光が水面上を駆け足で近づいてくるのが見え、その通り道では波が明るい、笑いかけるような緑色にきらめき、波頭が火のように波しぶきを上げる。それはまるで、帰還者たちを喜びの歓声を上げて挨拶を送っているかのようである。

しかし、彼らはそちらを見ていない。水兵も海兵隊員も押し合いへし合いしながら甲板に詰めかけている。どこにも場所がなくて救命ボートに座ったり、ずっと上のシュラウド¹にまでブドウの房のようにぶらさがっている。

全員の目はじっと前方に向けられている。前方には岸に打ち寄せる波の白い帯が、まだ見えぬ海岸線を示している。その背後にはドイツの地があるのだ。誰もが一番早く、その発見者になりたがっているのである。

今、それが見えてきた。碎ける波の上には樹冠と屋根が、おぼろげながら見える。それは蜃気楼のように水平線上にただよっている。ぼんやりしたものからはっきりと輪郭が現れてくると、そこに視線が釘付けになる。灰色の塔、ノイヴェルク島だ。

1 マストの両横に広がるように複数張られた固定ロープで、縄ばしご状にロープが張られている。

こんにちは、おやじさん。600 年前からここで守りにつき、帰還者に最初の挨拶を送ってくれる。ドイツがこれまで経験した中で最大で、もっともつらい時代を無事乗り越えられたのだから、おやじさんは神の思し召しで長い長い平和の時代を見ることになるだろう。そしてつぎつぎに現れる誇り高い商船と軍艦は、新ドイツの偉大さと力とを語って聞かせてくれるだろう。

通過。視界を遮るノイヴェルク島を過ぎ、もっと沢山見えてきた。ドゥーネン、それからクックスハーフェンの建物が光り輝き、大航路標識²が黒々と水面上に立ち上がっている。今や、そう今や古いものと新しいものが区別できるようになる。15 分後には接岸する。あとほんの 15 分だ。

どんどんと細かな様子が見えてくる。至るところ旗が見える。堤防の上には人々が歩いていて、そのうち何人かはこちらに手を振っている。彼らは新しい標識の方に急ぎ、歓迎式に加わろうとしているのだ。そこではすでに人々がひしめき合っている。その姿はまるで黒い壁のようで、その前を警官がふたり気ぜわしくあちこち動き回っている。てっぺんにとんがりのついたヘルメットをかぶり、紛れもないドイツの警官である。栈橋の前方を空けておかねばならないからである。そこには少人数の人が立っているだけである。ヘル

2 北海沿岸、エルベ川河口にある木製の航海標識で、約 30 メートルの高さがある。クックスハーフェンの市章にも描かれている。

メットと金の刺繍がきらめき、シルクハットがてかてかと輝いている。あ、なるほど。「お偉方」なのだ。その右端には海兵大隊の軍楽隊が立っている。ほら、見ろよ。まさしく灰緑色をまとったネズミイルカたちだぜ。軍楽隊長が指揮棒を振り上げる。軍楽隊が楽器を持ち上げると、日の光がぴかぴかの真鍮の上にちかちかと光る。演奏が始まる。何を演奏しているのか、まだ聞き取れない。風が楽の音をとらえて切り刻み、引っさらって行くからである。ティンパニーの音だけがこちらに響いてくる。タンドン、タンドン、タンドン、タンタン --- タンドン、タンドン、----

「おい、どうしたんだ。起きろよ。夢でも見てるのか」

「タンドン — タンドン — 音楽だよ — 聞こえるだろ — もうすぐ着くんだよ — ああ — もう戦争は終わった — ああ — —」

「音楽？そりゃそうだ。オーケストラが練習してるんだから。戦争が終わった？そんなことは今のところ忘れちまいな。これを読め。ルーマニアまで宣戦布告してきたんだ。なのに戦争が終わっただと。なんちゅうこった」

「ああ、そうか。そりゃそうだよな。…」